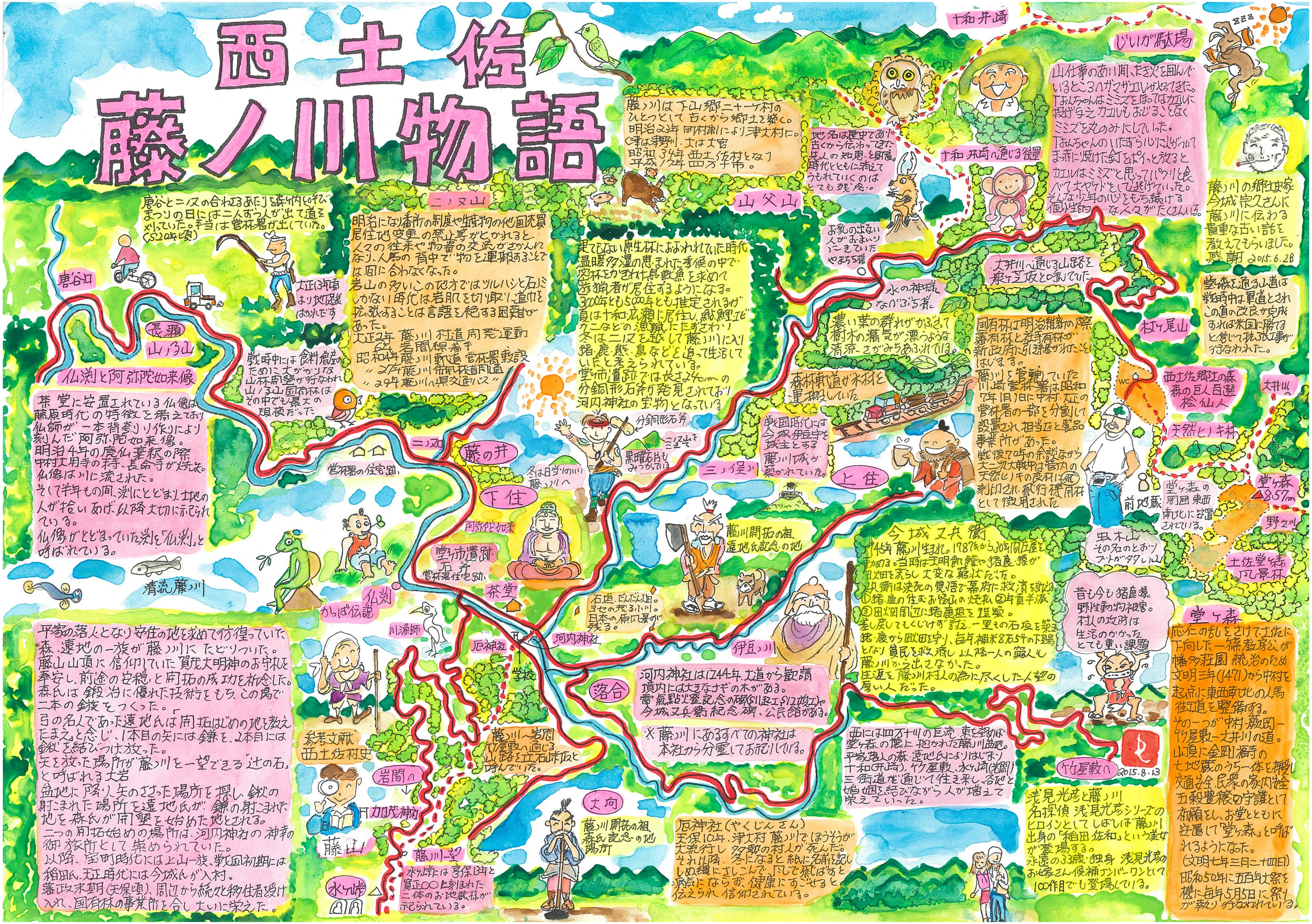
西土佐
藤ノ川物語



唐谷と二ノ又の合わさるあたりを森ヶ内と呼び まつりの日には二人ずつ人が出て道を刈っていた。手当は営林署が出していた。(S20年頃)

大正13年頃より地図製はかれです

明治になり番所の制度や生産物の他国売買 居住地変更の禁止等がとかれると、人々の往来や物資の交流がさかんになり、人馬の背中で物を運搬することでは間に合わなくなった。
岩山の多いこの地方ではツルハシと石ミしかない時代は岩肌を切り取り道巾を拡張することは言語を絶する困難があった。
大正2年 藤ノ川村道開発運動
6年 岩間線着手
昭和4年 藤ノ川軌道 営林署敷設
〃27年 藤ノ川供用林道開通
〃29年 藤ノ川へ県交通バス

藤ノ川は下山郷二十ヶ村のひとつとして古くから郷土を築く。
明治23年 町村制により津大村に。
(津は津野川、大は大宮)
昭和34年 西土佐村となり
平成17年 四万十市。

地名は歴史であり古くから伝わってきた先人の知恵と財産。時代とともに消えてうもれていくのはとても残念。

お乳の出ない人がおまいりにきていた やまちち様

山仕事のあい間、たき火を囲んでいるところへガマガエルがやってきた。Tおんちゃんはミミズをほってはカエルに投げ与えカエルもおじることなくミミズを丸のみにしていった。
Tおんちゃんのいたずら心に火がついて まっ赤に焼けた釘をポイっと放ると カエルはミミズと思ってパクリと食べて大ヤケドをして逃げていった。
そんな少年の心をもち続ける個性的な人々がたくさんいる。

藤ノ川の郷土史家 今城宗久さんに 藤ノ川に伝わる 貴重な古い話を 教えてもらいました。 感謝 2015.6.28

果てもない原生林におおわれていた時代 温暖多湿の恵まれた季候の中で 密林をかきわけ鳥獣魚を求めて 遊猟者が居住するようになる。
3000年とも5000年とも推定されるが 夏は十和・広瀬に居住し鮎・鯉・エビ・カニなどの漁猟にたずさわり 冬は二ノ又を越して藤ノ川に入り 猪・鹿・熊・鳥などを追って生活していたと考えられている。
堂ヶ市遺跡では長さ24cmの 分銅形石斧が発見されており 河内神社の宝物となっている。

水の神様 なべぶち様

濃い葉の群れがかぶさって 樹木の精気が漂うような 清涼さがみちあふれている。

大井川へ通じる山路を 象ヶ芝坂と呼んでいた。

堂森を通る山道は 戦時中は軍道とされ この道の改良が完成すれば米国に勝てると信じて拡張工事が行なわれた。

国有林は明治維新の際 藩有林と社寺有林が 新政府に引き継がれたことにはじまる。
藤ノ川を管轄していた 川崎営林署は昭和7年1月1日に中村・大正の 営林署の一部を分割して 設置され担当区と製品 事業所があった。
戦後70年の余談ながら 大二次大戦中は管内の 天然ヒノキの良材に(飛) 刻印され飛行機用材 として徴用された

森林軌道が木材を 運搬していた

戦国時代には 今城伊豆守を 城主とする 藤ノ川城が 築かれていた。

黒曜石片も みつかっている

冬は日当りのいい 藤ノ川へ

戦時中には食料増産のために大がかりな山林開墾が行なわれ 山ノ子山国有林は その中でも最大の 規模だった

仏渕と阿弥陀如来像

茶堂に安置されている仏像は 藤原時代の特徴を備えており 仏師が一本背割り作りにより 刻んだ阿弥陀如来像。
明治4年の廃仏棄釈の際 中村太用寺の末寺、長命寺が焼失。 仏像は川に流された。
そして半年もの間、渕にとどまり土地の 人が拾いあげ、以降大切に祀られている。
仏像がとどまっていた渕を「仏渕」と 呼ばれている。

石垣・だんだん畑。 ヨセの茂る小川。 日本の原風景が 残る。

藤ノ川開拓の祖 遠地氏記念の地

今城又兵衛

1745年 藤ノ川生まれ。1787年から30年間庄屋を勤める。当時は天明飢饉や猪鹿・猿が田畑を荒らし大変な窮状だった。
又兵衛は決死の覚悟で幕府に救済を訴える。
①猪鹿の住むお留山の焼払 ②年貢半減
③田畑周辺に猪鹿垣を建築。
差し戻してもくじけず訴え、一里もの石垣を築き 猪・鹿から田畑を守り、毎年補米8石5斗の下賜 となり貧民を救済し以降一人の窮人も 藤ノ川から出さなかった。
生涯を藤ノ川村人の為に尽くした人望の 厚い人だった。

虫木山 その名のとおり ブトが多い山

昔も今も猪鹿猿と 野性動物被害。 村人の攻防は 生活のかかった とても重い課題

堂ヶ森の 周囲東西 南北に安置 されている。

河内神社は1244年、大道から勧請 境内には大きなナギの木がある。 電気点灯記念の碑(S11起工 S12竣工)や 今城又兵衛記念碑、公民館がある。

※藤ノ川にあるすべての神社は 本社から分霊してお祀りしている。

藤ノ川〜岩間 竹屋敷へ通じる 山路を立石峠坂と 呼んでいた。

西には四万十川の巨流、東を望めば 堂ヶ森の懐に抱かれた藤ノ川盆地。 平家落人の森・遠地氏によりはじまり 十和(井崎)、竹屋敷、水ヶ峠(岩間) 三街道が通じて往き来し各地と 婚姻を結びながら人が増えて 栄えていった。

厄神社(やくじんさん)
天保10年、津大村藤ノ川でほうそうが 大流行し多勢の村人が死んだ。 それ以降、冬になると紙に名前を記し しめ縄にさしこんで、凧で飛ばすと 病気にならず、健康にすごせると 伝えられ信仰されている。

藤ノ川開拓の祖 森氏記念の地 場所

平家の落人となり安住の地を求めて彷徨っていた 森、遠地の一族が藤ノ川にたどりついた。
藤山山頂に信仰していた賀茂大明神のお守札を 奉安し、前途の安穏と開拓の成功を祈念した。
森氏は鍛冶に優れた技術をもち、この場で 二本の鏃をつくった。
「弓の名人であった遠地氏は開拓はじめの地を教え たまえ」と念じ、1本目の矢には鎌を、2本目には 鍬を結びつけ放った。
矢を放った場所が藤ノ川を一望できる「辻の石」 と呼ばれる大岩
盆地に降り、矢のささった場所を探し、鍬の 射こまれた場所を遠地氏が、鎌の射こまれた 地を森氏が開墾を始めた地とされる。
二つの開拓始めの場所は、河内神社の神幸の 御旅所として崇められていた。
以降、室町時代には上山一族、戦国初期には 稲田氏、天正時代には今城氏が入村。
藩政末期(天保頃)、周辺から続々と移住者を受け 入れ、国有林の事業所を合し大いに栄えた。

参考文献 西土佐村史

水ヶ峠には享保13年と 寛正〇〇と刻まれた 二体のお地蔵様が 祀られている。

浅見光彦と藤ノ川
名探偵 浅見光彦シリーズの ヒロインとしてしばしば藤ノ川 出身の「稲田佐和」という美女 が登場する。
永遠の33歳・独身 浅見光彦の お嫁さん候補ナンバーワンとして 100作目でも登場している。

堂ヶ森

応仁の乱をさけて土佐に 下向した一條教房公が 幡多荘園統治のため 文明三年(1471)から中村を 起点に東西南北の人馬 街道を整備する。
その一つが中村-蕨岡- 竹屋敷-大井川の道。
山頂に金剛福寺の 七地蔵のうち一体を移し 交通安全・民衆の家内安全 五穀豊穣の守護として 祈願をし、お堂とともに 安置して「堂ヶ森」と呼ば れるようになった。
(文明七年三月二十四日)
昭和50年に五百年大祭を 機に毎年5月5日に祭りが執り行なわれている。

2015.8.13